

沢登りの魅力

弁護士 長野 浩三



登山を趣味にして12年ほどになる。これまでも雪山登山などについて燦々書いたことがあるが、最近は沢登りによく行くようになった。私が加入している山岳会に沢登りに凝っている人がいて、それについて行っているからだ。

沢登りは一般の登山道ではない沢を遡行していく。水で濡れた岩の上を歩くので、シューズは沢登り専用のグリップのよいものを使う。以前はフェルトの底が主流だったが、最近はゴム製のグリップのよいものも増えた。

沢登りは、要は滑った岩登りなので岩登りをする際の道具と技術が必要だ。登る際に安全を確保するためにロープを体に結ぶハーネスやスリングやカラビナなどが必要な道具だ。また、クライミングをする際の確保技術や懸垂下降（ロープをつたって崖を安全に降りる技術）などができることも必要だ。

今年のゴールデンウィークには大峰山脈の岩屋谷という沢を遡行した。この谷の45m滝前の写真をみていただければ沢登りをする際の格好がわかる。岩登りなのでヘルメットをかぶり、水に濡れてもすぐ乾く速乾性のシャツに水で体温を奪われないようにウェットスーツ素材のパンツをはく。岩が滑っていた際にはたわし（私は亀の子たわしを使っている）で岩をごしごしとこすり滑りをとるのでたわしも携行している。滑りがひどい沢を遡行する際は沢の掃除をしているような気分になることもある。

この沢は1日で遡行することもできるようであるが、結構厳しく、我々は沢中で1泊ビバークした。この際の45m滝（写真参照）は直登することは難しく、滝の左のルンゼを巻くのがルートとされているが、その巻きもなかなか危なそうなので一旦少しもどって別のもう少し安全そうな巻きルートを通った。このように、滝を登れなかった際には横の巻きルートを登っていくのだが、巻けば安全というわけではなく、巻きルートがどろどろで滑って却って危



岩屋谷45m滝前にて▲



岩屋谷雌滝前にて▲



▲岩屋谷雌滝



▲岩屋谷雄滝前にて
(右下の小さな人影が長野)

険という時もある。なので、滝を直登するか巻くかは沢登りの際の重要な判断となる。

このように沢登りには危険が伴うにも関わらず、山登りの中で沢登りをする人が大勢いるのはなぜか。それはずばり、一般登山道ではない（なのでたくさんの登山者はいない）美しい淵や滝を見られるからだと思う。大峰の沢は比良の沢などに比べてスケールが大きく、水も深緑で美しく、ほんとに心洗われる気分になる。また滝がほんとに美しい。岩屋谷雌滝は写真でもそのスケールがわかると思うが、約70mの高さがある。この高さから水が落ちてきており、霧になって常に滝の下に降り注いでいる。この滝の前でビバークをし、翌朝滝を見ると、滝に朝日が差して虹がでていた。本当に美しかった。

そのあと、この雌滝の巻きルートに挑んだが、ここがなかなか難しく、同行した若者がなんとか突破し、私はロープでつないでもらって落ちない状態でなんとか登った。ここを抜けると、岩屋谷最大の滝、雄滝が見えてきた。雄滝は落差約130mの大きな滝だ。雄滝の写真の右下に小さな人影が写っているが、これが私だ。この滝のスケールの大きさがわかってもらえると思う。

沢登りのもう一つの魅力はビバークする際のたき火だろう。沢登りは水に濡れるために暖をとるためにもたき火をすることが多い。たき火は見ているだけで気分がいいし、たき火を囲んで持っていった酒のみ（酒は必ず持って行く）、山のこと、もろもろのことを話すのは沢登りのもう一つの醍醐味だろう。岩屋谷のビバークはまだ4月であったためにかかなり寒かったがたき火にだいぶ救われた。

沢登りは危険を伴うのでそれなりの準備と覚悟が必要だが、比較的 안전한沢から始めれば一般の登山道の登山では得られない喜びを味わえる。今後も体力が続けば安全第一を旨として沢登りを続けていきたいと思っている。